

巻頭言

寝かせて、粘って、書き直す。

寺山恭輔（教授）



この一年、ソ連の海上交通や船舶について考察してきた。その中でのエピソードを一つ。1932年11月にソ連のスターリン指導部は潜水艦建造の技術支援（設計や製造）を得ようと、ヒトラーが権力を握る前夜のドイツに軍の専門家を派遣することを決めた。筆者がロシアの公文書館で見いだした文書には、派遣先のみタイプ打ちではなく手書きでJ.V.Sと書かれているように見えた。その意味もわからずに昨年4月に投稿した論文には注釈なしにJ.V.Sと書いた。査読は通過し、文章をそのまま寝かせておいたが、昨年末、査読コメントに応じた修正原稿を提出する段になって、独ソ関係に関するロシアの公文書集の存在を思い出した。その本にあたると、この文書が掲載されていたもののJ.V.Sについては期待していた注釈はなかった。しかたないと諦めかけたが、納得できずネット上で1930年代、J.V.S、ドイツ、潜水艦と様々な用語で検索した結果、どうもJはIの誤りらしいことが判明した。最初の手書き部分を見直すとJではなくIのようにも見えると納得した次第である。てっきりI.V.Sはドイツ語だと思ったのだが、実はオランダ語の頭文字だというオチまでついてきた。もちろん書き直した論文では、筆者が始めからオランダ語と理解していたかのような書きぶりで、上記の文書集の誤りを訂正までした（I.V.Sの意味はネット上の『東北アジア研究』最新号掲載の拙稿で直接確認されたし）。独ソ関係に詳しい研究者ならば難なく解読できただろうが、一般の読者には文書集に誤りがあるとはなかなか想像できないだろう。1930年代にロシア語のタイプ

イターでは打てなかった文字を手書きしたため、私だけでなく上記文書集編纂者たちも解釈を誤ったということになる。筆者が例えばこの文書集だけを頼りにしていたら誤りに気づけただろうか？アカデミー会員が編集の総責任者を務め、定評あるモスクワの学術出版社の手になる文書集に疑いを持つことはなかっただろう。実際に一次史料に当たっていたこと、手書きであることが気になったこと、そのまま放置せずに探求を続けた結果、運良く正解にたどり着けた。

論文執筆の際にはこのように、一次史料で判読不明な箇所突き当たることも珍しくないのだが、不思議なことに時間をおいて改めて探索すると、正解に行き当たることもある。今回、別のロシア語の省略語でも経験した。査読で厳しい指摘を受け書き直すことも多いが、完成したと思って原稿を印刷業者に渡した後になっても訂正すべき・調べるべきところが目につき、多くの箇所に朱を入れた。一発で美しい文章を書けない者にとっては、文章は寝かせておき、時間をおいて見直す作業を繰り返すに限る。時間の経過とともに、それまで見えなかったものが見えるという副産物も生まれることもあるが、とにかく何かを書かないとそれも始まらない。3年前の拙稿(NL93)で述べた通り、北朝鮮レベルまで落ちたロシアはその砲弾や兵士を利用してウクライナ侵略を続行中だ。コロナ期を含めロシアを5年間訪問していないが、上述した歴史研究に鍵となる一次史料収集には、スターリン体制に加えプーチン体制の研究が可能となった体制転換後の新生ロシアに赴きたい。

contents

- 1 巻頭言
- 2 私の東北アジア研究
- 3 新任ごあいさつ
- 4 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか
- 7 著書・論文紹介
- 8 活動風景



自治体史編纂後の歴史資料の行方

竹原 万雄

上廣歴史資料学研究部門／助教



個人宅から市へ寄贈された古文書

2022年より山形県天童市の歴史資料所在調査に取り組んでいる。1970から80年代、古文書などの歴史資料を悉皆的に調査し、地域の歴史を叙述する自治体史編纂が全国各地で盛んに行われた。それから50年近くの時が経ち、かつて調査の過程で把握された資料の廃棄・散逸が危惧されている。追跡調査した事例によると、和歌山県では17%、大分県では33%など、およそ2～3割の資料群が所在不明となっていることが報告されている。

天童市においても、1970年度から天童市史編纂が企画された。市史刊行後、活用した資料のほとんどは旧家に返却されたが、その後の追跡調査は行われていない。そこで、天童市教育委員会・天童郷土研究会の協力のもと調査を開始した。

そもそも市史編纂時に使用した資料はどこのお宅あるいは公的機関にあったのか。その情報の把握すら容易ではない。そこで『天童市史料目録』（全3号）や『天童市史編集資料』（全48号）を手がかりに、市史編纂時に把握された資料群をピックアップした。結果、150件余の資料群を確認することがで

きた。但し、「〇〇家文書」といった資料群の名称が不統一であるため、今後の調査で数字の増減はでてくるであろう。150件余のうち、もともと個人宅にあったものは100件余。そのうち現段階で移管先の公的機関で資料の所在を確認できたものが9件、お宅を訪問して確認したものが3件、散逸・廃棄などによる資料の消滅や家がなくなってしまう追跡が困難になってしまったものが4件あった。

散逸・廃棄の原因を探ると、家の建替や蔵の取壊し、世代交代による資料への関心の低下があげられる。資料の所在を確認できたお宅でも、次の世代への継承を危惧する声が聞かれた。市史編纂に関わった方からは、かつて調査をさせていただいた際は、歴史資料は自家の「財産」という感覚が強く、寄贈しようとする家すら少なかったという話をうかがった。しかし、近年は、かつて調査された資料が廃棄されるといった事態が、天童に限らず、全国各地で起こっている。一刻も早い、調査の進展が望まれる。

早期の調査の理由はそれだけでは無い。市史編纂に関わった方々の高齢化

がすすんでいる。文書に記録されていない編纂時の記憶はもちろん、長い時間をかけて培われた資料所蔵者との関係性は調査に不可欠である。記憶を記録しつつ、これまで培ってきた人脈の継承も急がなければならない。

付随する問題も深刻である。調査をすすめるなかでも、家で保存することが難しいため、市へ寄贈された事例が複数みられた。他にも、寄贈を希望する声を耳にしている。しかし、市の保管スペースにも限界がある。また、保管はできても、寄贈された資料を活用するための整理がすすまない。整理するには、保存用の器材、さらにくずし字で書かれた古文書を解読する専門能力が求められる。

そこで本年度は、「山形県天童市における自治体史編纂後の歴史資料保存の実践」と題して共同研究を立ち上げた（東北アジア研究センター共同研究）。地元の研究者や資料保存の専門家、さらに将来的な人材育成を見据えて若手の研究者や自治体職員にも加わっていただいた。資料整理もすすめるべく保存用の封筒や文書箱を購入し、専門能力を有した人材として地元大学の卒業生に声をかけた。さまざまな方面からのご支援で、望ましい調査環境が少しずつ整えられつつある。

大学教員がこうした資料調査に関わることは、専門能力を活かすだけでなく、次の世代につなぐという意味でも重要である。先達が見出し、継承してきた歴史資料を未来へつなげるべく、継続的に地域の歴史資料に関わることができると意志をもった人材を育ててゆきたい。

たけはら・かずお 東北大学大学院環境科学研究科博士課程後期3年の課程修了、博士（学術）。東北芸術工科大学専任講師・准教授を経て現職。専門は日本近世・近代史、資料保存。

#1



Emmanuel Garnier

客員教授
[2025.2 ~ 2025.4]

エマニュエル・ガニエル ▶ パリ・サクレ大学気候環境科学研究所 (CEA, CNRS, パリ・サクレ大学の混合研究ユニット) の研究教授であり、歴史家として、過去千年間の気候変動・自然災害・環境変化に関心を持つ。

北極先住民のデジタルアーカイブと歴史

本研究プロジェクトは、東北大学東北アジア研究センター地域研究デジタルアーカイブ (DANA) の拡張に貢献するとともに、そこに北東アジアおよび西ヨーロッパの北極民族 (スカンジナビアやロシアのサーミ人) と彼らの災害リスクへの適応戦略に関する新たな歴史的知見を加えることを目的としています。比較の観点と過去の教訓に基づいた研究により、減災文化の醸成を目指します。

この目的のためには、これまで用いられることがはばなかった歴史的資料を先住民族研究に幅広く利用することを私たちは提案します。これらの先住民族に関する現在の知見は、基本的にはここ数十年の間 (つまり、先住民族の大部分が既に文化的に同化した時代) に、社会人類学者が収集したデータに基づいたものだからです。

歴史的資料として、重要度の高い順に、ロシア、スカンジナビア、ドイツ、フランスの探検家による記述を用います。彼らは、17世紀以降、ロシア帝国やスカンジナビアの君主国により組織された現地調査の一環として、北部および東部の地域を発見した探検家です。また、19世紀および20世紀前半については、西洋の科学者、特にナポレオン1世の直系子孫にあたるロラン・ボナバルトを始めとするフランス人によって集められ、現在パリのギメ東洋美術館とケ・ブランリ美術館に所蔵されている写真、地図、絵、版画、書簡、民族誌を補完資料として用います。

強い感情から力強い発想へ

ロシア・ウクライナ戦争がきっかけとなり、私は北極地方の現状をより深く理解するために東北大学にやって来ました。ロシアによるウクライナ戦争を支持しない科学者として、私はここ何年も声を上げたいと切望してきました。これが、私がCNEASの外国人研究員プログラムに応募した主な理由です。こうした経緯から、「ウクライナ紛争と『2月後の北極地方』— 社会的・政治的・国際的な変動の分析」を客員研究員としての研究テーマとしました。「2月後の北極地方」について新たな概念的枠組みを提示し、それにより2022年2月24日に起きたロシアによるウクライナ侵攻以降の北極地方における劇的な変化を説明したいと考えています。

東北大学における私の目標は、(1) 自身の研究テーマに関する講義を行うこと、(2) 当該研究テーマに関する学術論文や書籍の執筆を行うこと (これを今のロシアで行うことは不可能です)、(3) セミナーやシンポジウムにおいて研究結果を発表すること、(4) CNEASの同僚や学部生、大学院生、教員らに対して相談やサポートを行うことです。これらを通して、極北地域、ロシア、国際関係、ウクライナ戦争に関する問題に関心を持つ人々の役に立てると考えています。

#2



Arbakhan Magomedov

客員教授
[2025.2 ~ 2025.4]

アルバハン・マゴメドフ ▶ ロシア国立人文科学省、米国フルブライトプログラム、中国シルクロード基金等の奨学金授与。カリフォルニア大学バークレー校、北海道大学、島根大学、関西大学、同済大学 (上海) の客員教授歴任。

大窪健児

環境情報科学研究分野 / 学術研究員
[2024.11.1 ~ 2025.3.31]

研究テーマ: 新人・旧人交替劇の数理モデリング、遺伝子ネットワークの数理モデリング

#3

アンナ・ステムラー = ゴスマン

ラップランド大学北極センター (フィンランド)
ロシア・シベリア研究分野 / 客員研究員
[2025.1.11 ~ 2025.1.26]

研究テーマ: 北極における災害人類学

#4

歴史資料学研究会第2回特別例会

近代日本経済史の研究動向を知る



荒武賢一郎

(上廣歴史資料学研究部門／教授)

会期 2024年11月23日

会場 東京大学本郷キャンパス小島ホール

上 廣歴史資料学研究部門では、2022年4月から歴史資料学研究会を毎月1回のペースで開催してきた。本会は、オンライン形式で海外在住者を含む歴史研究の専門家に口頭



谷本雅之著『在来的発展と大都市』表紙

発表を依頼し、報告内容についての議論とともに交流の充実を目指している。これに加えて不定期ながら、対面でおこなう「特別例会」を企画してきたが、今回は近代日本経済史における最新の研究動向を全体テーマとして、研究報告および書評の2本立てで構成した。研究報告の谷川みらい氏（東京外国語大学）「開拓使廃止後の北海道関連企業と旧開拓使吏員」では、明治前期における日本の北方地域開発を担当した開拓使（1869-1882年）の諸事業を紹介しつつ、その後に設立された北海道運輸会社と北海道共同商會に注目しながら、「官と民」の関係を詳しく分析している。この過程では多くの人びとが関与することがわかり、また企

業成立の状況を見ることで地域史研究への波及が強いことも看取できた。研究会後半では、『在来的発展と大都市—20世紀日本における中小経営の展開』（名古屋大学出版会、2024年）について、著者である谷本雅之氏（東京大学）から本書の課題や論点の説明があり、続いて評者の酒井一輔氏（東北大学経済学研究科）より成果と課題を中心にコメントがおこなわれた。全体は、日本経済の特徴と称される中小経営に注目した最新の成果であるが、東京の小工業や玩具業界を対象として戦前・両大戦間期・戦後の特徴を論じている。詳細は、酒井氏執筆の書評が『東北アジア研究』第29号に掲載されているのであわせて御覧いただきたい。

2024 Anthropology of Japan in Japan Annual Conference

Community, Collaboration, and Co-production



デレーニ・アリーン

(日本・朝鮮半島研究分野／准教授)

会期 2024年11月30日～12月1日

会場 東北大学青葉山コモンズ

2 024年11月30日から12月1日にかけて、2024年度「日本における日本人類学年次大会」が東北大学青葉山コモンズで開催された。SEAQUESTプロジェクト（SOKAP-Connect）に触発され、会議のテーマは「コミュニティ、協働、共同制作」とされ、これは社会学者として依存している利害関係者や文化コミュニティのメンバーとどのように協力し、協働するかに関する研究や研究方法を発表・議論するための一つの道筋となった。そこで提起された質問の一つには、「協働はどのように理論的な仕事を強化し、改善するか？」や、「そのような協働は、伝統的な技術やポップカル

チャー、災害復興、地域活性化の新たな形態（ボランティア活動や海漁業など）を通じて、どのように社会的な運動や復興活動に貢献するか？」などがあった。パネルディスカッションの中には若手や新進の学者による特別セッションや、東北大学名誉教授である沼崎一郎氏の基調講演が含まれていた。また、本学大学院環境科学研究科博士後期課程の成澤みくは、「不確実性を乗り越える：気候変動と日本における海藻栽培の未来」という優れた発表により、非専任の発表者による最優秀発表としてハルミ・ベフ賞を受賞した。

例年通り、親密な雰囲気の大会であったが、今年のAJJには70名以上の国内

外の学者が参加し、盛況であった。このイベントはSEAQUESTプロジェクトと東北アジア研究センターの共催で行われた。



Narisawa Miku receiving the Harumi Befu Prize

Crisis of Wellbeing and Wellbeing in Crisis across Borders



志宝ありむとふて (マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット/特任助教)

ボレー ペンメレン セバスチヤン (災害科学国際研究所/准教授、兼務教員)

会期 2024年12月5日～7日

会場 東北大学 知の創出センター



人間文化研究機構グローバル地域研究プログラム (GAPS) および東ユーラシア研究プロジェクト (EES)、東北大学東北アジア研究センター (CNEAS)、並びに東北大学災

害科学国際研究所 (IRIDeS) は、東北大学知の創出センターをホスト機関として「ウェルビーイング、災害、危機、人類学、歴史と地域研究」をテーマに3日間にわたる会議を開催した。イベントは、2011年の東日本大震災と津波の被災地を訪れるフィールドトリップ(12月5日)から始まった。2日目(12月6日)は、若手研究者セミナーが開催され、5名の博士研究員および大学院生による発表が行われた。3日目(12月7日)は、「移行と変容：変化する環境におけるウェルビーイングの探求」、「遊牧、国境、ウェルビーイング：現代の牧畜民における危機と移動を巡る生活戦略」、「災害時における障害者：移動性、福祉、社会的包摂」

「ロシアのウクライナ侵攻と先住民のウェルビーイング」等4つのセッションからなる国際シンポジウムが行われた。本シンポジウムには、香港(嶺南大学)、ヨーロッパ(オックスフォード大学、タルトゥ大学、ヘルシンキ大学、ヴィリニュス大学)、モンゴル(モンゴル国立大学)、アメリカ(シンシナティ大学)、および日本(京都大学、名古屋大学、大阪教育大学、国立民族学博物館、立命館大学、佐賀大学、東京大学)から、著名な学者や若手研究者が集まった。海外からは5カ国から9名を含む50名の参加者が聴衆として参加し、三日間にわたり活発な議論がなされ、世界の各大学が協働して研究に取り組む可能性が示された。



著名な学者や若手研究者が集まった

ワークショップ

第13回東北大学若手アンサンブルワークショップ



藤媛媛

(情報拠点分野/助教)

会期 2024年12月11日

会場 東北大学片平さくらホール



第13回若手アンサンブルワークショップが2024年12月11日(水)に片平さくらホールにて開催された。本ワークショップの目的は、東北大学附置研究所・センター連携体所属の若手研究者を中心とする部局間共同研究を促進・強化することであり、年2回開催されている。今回のワークショップでは、招待講演、ポスターセッション(ポスター賞あり)、ランチ懇親会(希望者のみ)が設けられた。招待講演では、大塚朋廣准教授(材料科学高等研究所/電気通信研究所)が「An ensemble of new materials and quantum technologies」と題し、量子デバイスに関する研究を紹介した。また、苫井高明教授(学際科

学フロンティア研究所/多元物質科学研究所)は「研究所若手アンサンブルプロジェクトは如何にして始まったのか?」というタイトルで、若手アンサンブルプロジェクトの経緯や歴史について発表した。ポスターセッションでは24件の報告があり、若手研究者を中心に、異分野・部局間の研究者同士が活発な議論を交わした。また、センターの元学術研究員の石井花織氏(現・東北メディカル・メガバンク機構)は、「お金はごみ問題を解決するのか? アラスカ遠隔地の衛生状況の地域差に係る社会的・地理的要因の検討」というタイトルで報告を行い、参加者の投票により優秀講演賞に選出された。次回のワークショップは2025年の

春に開催を予定しており、ご関心のある方は、ぜひご参加ください。



ポスターセッションの様子

「海業」における地域文化を考える

地域研究は現実社会にどう役立つか



石井弓

(中国研究分野／准教授)

会期 2024年12月14日

会場 東北大学片平キャンパス北門会館 2F エスパス

「海業」とは、海の豊かな資源や美しい自然を活かしたあらゆる活動を可視化する概念である。気候変動、人口減少、漁業ルールの変編など多くの課題に直面する三陸沖に住む人々と、海業を巡って議論することで、地域の可能性に気づき、コミュニティの持続と再活性化を探るというのが、デレーニ先生がオーガナイズされた国際ワークショップの主旨であった。

会場は一般の参加者で埋め尽くされた。東海大学の関いずみ先生が「海業」概念を解説、シドニー工科大学のケイト・パークレー先生がオーストラリアでの海に関わる研究と取組を紹介、地域おこし協力隊員の吉田夢さんが、歌や写真で浦戸諸島での活動を紹介した。中国研究者である私は、中国の村落コミュニティがいかにか文化大革命を生き抜き再活性化し

たかを話した。参加者は皆食入るように聞いていたが、このWSに貢献できたのが気がかりだった。

グループ討論では、行政の取組を利用しつつ、海に向き合う日常からどのような新しい活動が可能なのか、意見や問いが次々に発せられた。むしろ彼らが専門家であり、震災を経て生き残った漁業関係者が、研究を現実の問題解決に積極的に取り入れてきたことに気付かされた。不安定な漁業に対し、海業が安定的な産

業を発掘し、地域を結び付けることで、セーフティネットとして機能しているようだ。そこでは女性たちの活動が際立つ。東北の海辺の地域には今、環境の変化に応じるしなやかさが求められている。

中国の村落ネットワークは、アメンバー状に変形しながら社会主義の地域改編を生き延びてきた。それが東北の海辺のしなやかさに通じるのであれば、海業の発展に何か貢献できるのかも知れないと考えた。



会場の様子



グループ討論の内容を発表する参加者

石川×東北 研究者対話セミナー

能登の里山里海文化の復旧復興と継承を考える：東日本大震災の教訓から



デレーニ・アリーン

(日本・朝鮮半島研究分野／准教授)

会期 2024年12月15日

会場 石川県政記念 しいのき迎賓館

2024年12月15日、石川県金沢市において、【石川×東北 研究者対話セミナー】「能登の里山里海文化の復旧復興と継承を考える：東日本大震災の教訓から」が開催された。このセミナーは、石川県内の研究者と災害科学の専門家が集まり、能登半島地震および豪雨後の復旧計画や災害対応について知見を共有し、議論を深めることを目的としていた。

セミナーは、災害公衆衛生学分野の栗山進一所長の開会挨拶で始まり、その後、石川県立大学および東北大学の研究者による発表が行われた。また、当センター

のデレーニ准教授も参加し、宮城県七ヶ浜町の「七七つながり支援隊」の活動を通じて行った参加型観察調査について発表した。この発表では、過去の災害の被災者が復旧活動において重要な役割を果たすことが強調された。また、被災者自身の経験や価値観が、重要なメッセージや行動として活用されることが示された。

セミナーでは、活発な議論が交わされ、盛会のうちに終了した。

石川県からは、能登地方での被災対応や「能登の里山里海世界農業遺産」などの取組に関わる関係者が参加した。

本セミナーは、石川県立大学と当セン

ターの共同研究プロジェクトが主催し、災害科学コアリサーチクラスターおよび東北アジア研究センターが後援した。



支援団体の活動には、七ヶ浜から米や海苔の寄付もあった

Maps and the Right of Nomadic People: Spatial Representations of Nomadic Societies and Landscapes in Northeast Asia



寺尾萌

(マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット/学術研究員)

会期 2025年1月11日

会場 東北大学東北アジア研究センター 4階大会議室

鹿 児島大学教授の尾崎孝宏氏・オックスフォード大学講師のアリエル・エイハーン氏によるJRP-LEAD「ポストコロナの内陸アジア牧畜民社会に関する比較研究」



研究会参加者の記念写真

(PPIA) と、NIHU グローバル地域研究推進事業 東ユーラシア研究プロジェクト 東北大学東北アジア研究センター 拠点 (EESTU) との共催による本研究会では、内陸アジアの牧畜民の空間利用の実態と地図によるその表象に注目し、「ノマディック・スペース」をいかに記述することができるのかを議論した。

研究会の前半では、モンゴルの牧畜民の牧草地管理や保護の実態や、コミュニティや家屋の境界がいかに観念されているのかに関して、人類学と歴史学の視点から、4名の発表が行われた。午後の部では、清朝下の行政や、旧日本軍、鉾山

開発企業や現代の行政等、多様な主体が牧畜民の宿营地や地名を記録した地図が、いかなる意図や技術をもって作成されたのかを人類学の視点から批評する4名の発表があった。全発表の後に、コメントーターとしてお招きした東北アジア研究センター教授の岡洋樹氏より地図というメディアや技術は、牧畜民的な空間認識や空間利用をいかに表現し得るのか/し得ないのかに関するコメントと問題提起をいただいた。国際的かつ学際的な視点から、それぞれの発表者が持つ地図資料や知見を交換する有意義な研究会となった。

BOOKS

著書・論文紹介

RECENT PUBLICATIONS



ISBN 978-4-8433-6868-8

書誌書目シリーズ125八戸書籍縦覧所関連資料 全3巻

日本最古級の図書館・八戸市立図書館の源流

鈴木淳世 著 ゆまに書房 2024年11月刊

text: 鈴木淳世

現在、青森県東部には八戸市立図書館という公共図書館 (public library) が存在している。同館は明治7年 (1874) 創設の私立図書館「八戸書籍縦覧所」を前身としており、その歴史は150年以上に及ぶ。しかも、八戸書籍縦覧所は宝暦3年(1753)頃創設の書物貸借組織「大仲間」を前身としており、八戸市立図書館は270年以上の歴史を有しているとも言え換えられる。もちろん、八戸書籍縦覧所創設時期を起点として考えてみたとしても、それ以前に東京書籍館(国立国会図書館の淵源)が創設されていたことなどを踏まえれば、日本《最古》の図書館とは言

い難い。さらに、現在の国際的な基準に照らし合わせれば、八戸書籍縦覧所を公共図書館と見なすことも難しい。とはいえ、八戸市立図書館は近世書物貸借組織から近代公共図書館に至るまでの組織の連続性が認められる希有な事例であり、日本《最古級》の図書館であることは間違いない。実際、八戸市立図書館には八戸書籍縦覧所関連資料が多く残されており、歴史の長さがうかがえる。そして、そのうち特に重要な蔵書目録を中心とする関連資料を収録したものが本書である。日本の近代公共図書館・近世書物貸借組織の研究のために役立ててほしい。

蔵王山調査の苦労話

後藤章夫

(地球化学研究分野/助教)



これまで懇話会ニューズレター「うしとら」59号とセンターニューズレター73号に、蔵王山の火山活動について書いてきた。2012年から見られた活発化は2020年に終息し、我々の現地調査も2024年で一区切りとした。その成果は論文にまとめているところだが、今回は調査にまつわる苦労話を書こうと思う。

蔵王山一帯は国定公園のため、調査には許可が必要と考えられた。しかしどこに何を申請すればよいか分からない。とりあえず蔵王町の観光協会に問い合わせると、宮城県の出先機関を紹介された。そこに出向くと観測機材の設置には「特別保護地区内工作物の新築許可申請書」を出すよういわれ、A4判1枚の様式を渡された。簡単そうに思えたが、やってみるとこれが大変。土に埋められたり水中で見えない部分でも、大きさ、材質、色などを一つひとつ、こと細かに書かなければならない。ロープの占有面積も長さにも太さをかけて記すといった具合。それらの模式図に、設置場所を示す地図と写真、さらに様式任意の申請理由書も必要で、担当者の手直しを何度も受けながら完成した書類は、A4判1枚と思っていたのが計11枚にもなった。

書類の完成が見えてきた頃、林野庁の機関である森林管理署にも連絡するようその担当者から言われた。1つの申請でなぜかと思ながらもそうすると、来所して説明するよう求められ、なぜまた同じ説明をと、さらにわからなく

なる。何度かのやり取りを経てようやく、県への申請は自然保護関係、森林管理署は国有林野の土地借用関係とわかった。でも、様式は違えど書く内容はほぼ一緒。マイナカードで1本化、みたいな訳にはいかなかった。

なかには本当に必要かと思う申請もあった。火口湖の御釜で活動があれば、その水質に変化が予想される。分析用の採水を県の担当者に相談すると、当初は申請不要と言っていたのが、あとからやはり必要という話になった。送られてきた様式は「特別保護地区内水位(水量)に増減を及ぼさせる行為許可申請書」。農業用水などの大規模取水を想定したものだろうが、分析に使うのはせいぜい数リットル。仮に100リットル汲んだとしても、御釜の面積で割れば千分の1ミリにもならない(一応、まじめに計算した)。「水位(水量)の増減の内容」の欄には『変化なし(検出限界以下)』と書いたが、出さなくて良いという話にはならなかった。

申請以上に大変だったのが、調査時の体力的なキツさだ。御釜は展望所より低い位置にあり、行きは下り、帰りは登りが多くなる。観光で立ち入れる範囲を出てすぐの、帰りの最終盤に当たるところには、スキー場なら上級者コースになりそうな急斜面もある。行きはゴムボートにほかの機材や飲料水を合わせた20kgほどを担いで浮き石の多い急斜面を下り、帰りはゴムボートの水濡れと分析用の水で30kgほどに

なった荷物を担いで上がらねばならない。山好きや、山小屋に荷物を運ぶ歩荷(ぼっか)にはどうってことのない重さかもしれないが、私は山歩きが好きなのではない。必要に迫られてやっているだけだ。

歩き始めて程なく噴き出し始める汗は、体の水分が減るにつれて濃さを増すのか、目に入ると強くしみる。息が上がり何度も立ち止まるが、荷物を下ろすと背負い直すのが大変なので、立ったまま両膝に手を当て、上半身にかかる重さを腕から足に逃がしながら休憩をとる。最後の急斜面はなかなか出口が見えず、永遠に続くようにすら思える。両足の外反母趾が痛む。もうやめてしまいたい… そんな時はNHKの「みんなで筋肉体操」で筋肉指導の谷本道哉氏が放った声かけを心のなかで繰り返しながら、つりかけた大腿四頭筋に力を込めて、最後の歩を進めるのだった。

キツくても ツラくない!

キツくても 楽しい!!



御釜からの帰路、ゴムボートを担ぐ筆者。

編集後記

様々な分野の国際色豊かなイベントを多く紹介しました。専門家間の難しい議論が行われたものや、市民に向けたアウトリーチなどさまざまあります。東北アジア研究センターは文系から理系まで多岐にわたる研究やそれらが融合した研究を社会に発信できる希少な研究機関ですね。(平野直人)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第104号

2025年3月27日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!



X(旧Twitter)
をチェック!

